

# L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X による『認知科学』論文作成ガイド 2022 版

認知 花子<sup>1,2,\*</sup> 知識 太郎<sup>1</sup> ホーマー コーギト<sup>3,†</sup> 学習 好子<sup>1,‡</sup>

<sup>1</sup> 日本認知科学大学 <sup>2</sup> 日本学術振興会 <sup>3</sup> 米国認知科学大学

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X guide 2022 for the journal *Cognitive Studies: Bulletin of the JCSS*

Hanako Ninchi<sup>1,2,\*</sup> Taro Chishiki<sup>1</sup> Homer Cogito<sup>3,†</sup> Yoshiko Gakushu<sup>1,‡</sup>

<sup>1</sup> Japanese Cognitive Science University

<sup>2</sup> Japan Society for the Promotion of Science

<sup>3</sup> University of Cognitive Science, USA

This is a guide to prepare a final camera-ready manuscript of an article to appear in *Cognitive Studies: Bulletin of the Japanese Cognitive Science Society* using L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X and special style files. The authors would also find it helpful to refer to the L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X source file of this document that is distributed together with the style files.

**Keywords:** cognitive science (認知科学), paper writing (論文執筆)

Received 1 January 2022; Accepted 18 February 2022; Available online at J-STAGE 15 June 2022

## 1. はじめに

本文書 (ver. 20221130) は、日本認知科学会が発行する学術雑誌『認知科学』に投稿する論文原稿を L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X (pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X/upL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X) を用いて作成する際の注意事項を説明するものである。

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X を用いて最終原稿を作成すると、著者にとっては組版時の誤りを避けることができ、また、学会にとっては学会誌の制作コストを節約することができるため、日本認知科学会編集委員会は L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X による投稿を歓迎する。著者は、論文の形式を統一するため、このガイドに則って原稿を作成する。

印刷用の最終的な L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X ファイルの作成は、編集委員会のボランティアと印刷業者の共同作業で行っ

ている。その作業の負荷軽減とミスの最小化のために、著者の協力が不可欠である。最終原稿の L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 化の処理は以下のように行なわれる。

- (1) 著者は、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X により最終原稿を作成する。投稿論文は、査読後に内容を変更することはできない。出版社とは完全原稿による入稿の契約をしていることから、原則として、入稿後には著者の都合による原稿の訂正はできない。よって、入稿前の段階で文章の十分な推敲をする。最終作成にあたって相談や質問があれば、編集委員会事務局 (jcsedit-jimu@jcss.gr.jp) に問い合わせる。
- (2) 著者は、最終原稿の L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X ソースファイルと PDF、図表の原版、著者写真などを、投稿査読システムを通して編集委員会事務局に提出する。
- (3) 学会編集事務局と出版社は、著者から送られてきた原稿に対して必要な修正を行ない、ゲラ刷り (PDF) を作成する。学会編集事務局は、ゲラ刷りを著者に送り、校正を依頼する。
- (4) 著者校正は、スタイラスペン等を使って、ゲラ PDF に手書きで記入するか、ゲラ PDF を紙に

知識太郎の現在の所属は、(株)認知科学社。

本論文は、日本認知科学会第 37 回大会で報告したデータ (認知・知識, 2020) を新たに IRT に基づいて分析して考察を深めた。本論文の査読前原稿は、OSF Preprints (19 Aug 2020) で公開済みである (<https://doi.org/10.31219/osf.io/xxxxx>)。本研究の実験材料と実験データは OSF で公開している (<https://osf.io/xxxxx>)。

\* 責任著者。E-mail: hanako.ninchi@xxx.ac.jp

† homcog@xxx.edu ‡ y-gakushu@xxx.ac.jp

図 1

PDF で用意した図の取り込み例.



印刷して手書きで校正を記入したものをスキャナーで読み込んで再び PDF にする方法で行う. 修正箇所の見落としが発生しやすいため, PDF のコメント機能 (ノート注釈やマークアップツール) を利用した方法は使用しない.

- (5) 校正の段階で, 著者責任による内容の修正がどうしても必要になった場合は, その内容を編集委員会と出版社が検討した上で, 例外的に認める場合がある. 修正作業に費用が発生する場合は, 著者が実費を負担する.
- (6) 著者の校正に基づき, 最終的な組版を行なって印刷する. ただし,  $\text{\LaTeX}$  環境は, 著者の使用しているものと印刷用のものが同じとは限らない (特にフォントなど). したがって, 著者のハードコピーとゲラ刷りや最終印刷結果が微妙に異なることもある.

## 2. スタイルファイル

スタイルファイル `cs.cls` は, 日本認知科学会ウェブページ (<https://www.jcss.gr.jp/>) で配布されている. 本文書のソース `sample.tex`, 文献スタイル `jcss.bst`, 文献リストのサンプル `sample.bib` などとともに著者に提供される. 本スタイルファイルは, 日本語  $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  で処理されることを前提としている. 日本語コードは Unicode (UTF-8) である.

本スタイルファイルは, 学会誌に掲載する論文の印刷形式を統一するために作成したものであるから, 当然のことながら, 論文文中で行の長さや行の間隔, 文字の大きさなどのパラメータを変更するような記述をしてはならない.

## 3. 図

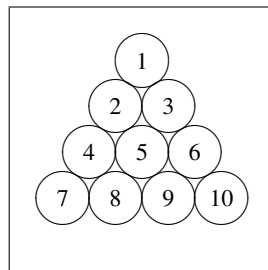
### 3.1 図の表現方法

図は, 一般に次のような方法で表現される. いずれの場合も `\begin{figure}` と `\end{figure}` で囲んでおく.

- (1) 外部のアプリケーションで作成したベクター形式の図 (PDF や EPS など) や, ラスター画像

図 2

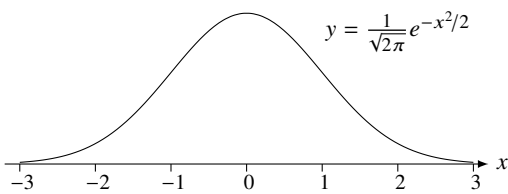
`picture` 環境内で `\multiput` コマンドを使って描いた図の例 (伊藤, 1991p. 209 より)



註) この例のようにキャプション内で `\cite` コマンドを使う場合は, `\protect` をつけないとコンパイルでエラーになる.

図 3

`TikZ` パッケージによって描画した図の例.



(JPEG や PNG など) を取り込む. `graphicx` パッケージ (3.2 節) を使う (図 1).

- (2)  $\text{\LaTeX}$  の作図環境を使用する. 比較的簡単な図なら, 伝統的な `picture` 環境を使って描くことができる (図 2). `picture` 環境による図は, 文字と同様に処理される. `TikZ` パッケージを使うと, かなり複雑な図も描くことができる (図 3). 図の中に  $\text{\LaTeX}$  の数式を容易に埋め込めるのも大きなメリットである.

### 3.2 `graphicx` パッケージ

外部のアプリケーションで作成した図を取り込むには, `graphicx` パッケージを使用する (パッケージの指定方法は 4.4 節を参照). たとえば, 画像ファイル `sample-fig.pdf` を挿入する場合には, 以下のように指定する.

```
\includegraphics{sample-fig.pdf}
```

図 1 はこの方法を用いた図の挿入例である.

以前は, 図は EPS で挿入するのが一般的であったが, 最近では, `dvipdfmx` 経由で, または `pdf $\text{\LaTeX}$`  で直接 PDF 出力することが多いので, ベクター形

表 1

各原稿種別で指定する必要がある項目

	論文・ 解説 paper	論文 (英文) paperEn	とびら (特集等) article	大会発表 賞論文 article	受賞者の 言葉 article	会議報告 article	フェロー・ 文献紹介 guide	巻頭言 foreword
\topleft	○	○	●	●	●	—	—	●
\topright	●	●	—	●	●	●	●	—
\titleEn	●	—	—	●	●	—	—	—
\authorEn	●	—	—	●	●	—	—	—
\affiliation	●	●	—	●	●	—	—	—
\affiliationEn	●	—	—	●	●	—	—	—
abstract 環境	●	●	—	—	—	—	—	—
gaiyo 環境	—	—	—	●	—	—	●	—
\keywords	●	●	—	—	—	—	—	—
\history	●	●	—	●	—	—	—	—
\authornotes	●	●	○	●	○	● <sup>1</sup>	● <sup>2</sup>	—

註) ●: 必要, ○: 任意 (入れても入れなくてもよい), —: 不要.

1: 各紹介者の所属名 (のみ), 2: 文献紹介は「紹介者所属:」として所属名.

\title, \author, \runningheadauthors, \maketitle は全種別で必要.

書評 (bookreview), 博士論文紹介 (phd) は, 表内のどの項目も不要.

式は PDF, ラスター形式は PNG か JPEG で取り込み, 変換作業を経ずに PDF に埋め込むのが賢明である. たとえば, PowerPoint で作成した図を取り込むには, PDF で書き出してから余白を削除する (pdfcrop コマンドなどを使う) のがよい.

#### 4. スタイルファイルの使い方

原稿の L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X ソースファイルは, 付録 A にある形式で作成する.

##### 4.1 投稿用オプション

原稿の投稿時には, 以下の例のように原稿種別の他に toukou と指定すると, 査読用に行番号がついた出力が得られる. 投稿原稿はこのオプションを利用して作成する.

なお, toukou を使用する場合は, amsmath パッケージも読み込むようにする. これは, cs.cls から自動的に読み込まれる lineno.sty のバグ回避のためである.

##### 4.2 原稿種別

現在のところ, スタイルとして指定できる原稿種別には, 以下のものが用意されている. 自分の原稿の種別を選んで指定する.

- paper: 論文 (研究論文, 展望論文, 短報論文, 資料論文, 誌上討論, 解説など)

- paperEn: 論文 (本文が英文の場合)
- article: 記事 (特集等のとびら, 受賞者の言葉, 大会発表賞論文, 会議報告など)
- articleOne: 一段組の記事 (追悼記事など)
- foreword: 巻頭言 (および学会からのお知らせ)
- forewordEn: 巻頭言 (本文が英文の場合)
- guide: 紹介記事 (フェロー紹介, 文献紹介など)
- bookreview: 書評
- phd: 博士論文紹介

各原稿種別で必要とされる項目は, 表 1 に示す通りである.

##### 4.3 日英の違い

本文が和文の場合と英文の場合の違いは, 以下の通りである. なお, この切り替えは, 原稿種別の指定 (e.g., paper/paperEn) によって自動的になされる.

- トップページ: 日本語著者情報の有無
- 本文: 英文の場合は行間を 85% に縮小
- 欄外見出し (トップページ以外):  
「認知科学」／“Cognitive Studies”
- 図表のキャプション:  
「図 1」「表 1」／“Fig. 1”, “Table 1”
- 引用文献の見出し: 「文献」／“References”
- 謝辞の見出し: 「謝辞」／“Acknowledgment”
- 付録の見出し: 「付録」／“Appendix”

#### 4.4 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X パッケージの追加

パッケージを使用するには、`\usepackage{...}` で指定する。たとえば、`graphicx` パッケージを `dvipdfmx` オプション付きで追加する場合は、次のように指定する。

```
\usepackage[dvipdfmx]{graphicx}
```

本スタイルファイルと矛盾するようなパッケージは使用しないように注意する。

#### 4.5 巻数, 号数, DOI, 受付・採録・早期公開日

巻数, 号数, 先頭ページ (`\page`), DOI, 受付／採録決定年月日, 早期公開年月日 (年は西暦) を記述する。いずれも, 採録決定後に決定するものである。投稿時は記述しなくてよい。

DOI は, 記述がある場合, トップページの欄外見出しに出力される。受付日・採録日・早期公開日は, 記述がある場合, 英文概要 (または和文概要) の下に出力される。

早期公開原稿は, `\advancepublication{2022}` (引数は公開年) のように指定する。

#### 4.6 表題などの記述

表題, 著者名とその所属, および概要を前述のコマンドにより定義した後, `\maketitle` によって出力する。

**表題** `\title` で定義した表題は中央揃えされる。自動的な改行は行なわれないので, 文字数の多いものについては著者が適宜 `\\` を挿入して改行する。

**著者名と所属** `\author` で定義された日本語著者名のみが表題には用いられる。複数の著者がある場合には, 各著者名を `\quad` で区切る。なお, 和文著者名は姓と名の間に半角の空白を入れる。ORCID iD は掲載する場合は, `\iD` コマンドを使って著者名のすぐ右横に ORCID のロゴを入れる (ORCID iD へのリンクが埋め込まれる)。

**概要** 概要は英文で記述し, `\begin{abstract}` と `\end{abstract}` の間に書く。

#### 4.7 著者注釈

各記事のトップページの左下の脚注には, 著者注釈 (Author Note) を掲載する。著者注釈に載せる情報とその順序は以下の通りである (本文書のトップページに著者注釈の例がある)。

(1) 著者貢献度等についての注意書き (複数著者が

等しい貢献度である場合などに限る)

- (2) 著者の現所属 (論文の表記 [=研究実施時の所属] と異なる場合のみ)
- (3) 当該論文の既公開論文との関係 (関連論文が存在する場合のみ)
- (4) 関連データや資料等の公開情報 (外部サイト等で公開している場合のみ)
- (5) 連絡先情報 (掲載を希望する場合のみ, ただし責任著者は必須)

著者注釈は, 以下のよう指定する。

```
\authornotes{...}{author@xxx.ac.jp}
```

著者が 1 名のときは `\authornotes*` を使用する (「責任著者」の表示が省略される)。ORCID iDs の表記方法については, この文書のソースを参照する。

#### 4.8 文章の記述

**句読点** 句点には全角の「。」, 読点には全角の「,」を用いる。ただし英文中や数式中で「,」や「,」を使う場合には, 半角文字を使う。

**全角文字と半角文字** 全角文字と半角文字の両方がある文字は次のように使い分ける。

- (1) 括弧は全角の「(」と「)」を用いる。但し, 英文の概要, 図表見出し, 文献では半角の「(」と「)」を用いる。
- (2) 英数字, 空白, 記号類は半角文字を用いる。ただし, 句読点に関しては, 前項で述べたような例外がある。
- (3) カタカナは全角文字を用いる。
- (4) 引用符は開きと閉じを区別する。開きには「“」(ソースでは “=シングルクォーテーションマーク二つ) を用い, 閉じには「”」(’’) を用いる。

**Overfull と Underfull** 組版時には大幅な overfull は起こさないことを原則としている。したがって, まず提出するソースが著者の環境で overfull を起こさないように, 文章を工夫するなどの最善の努力を払っていただきたい。ただし, `flushleft` 環境, `\\`, `\linebreak` などによる右詰めをしない形での overfull の回避は, できるだけ避ける。また著者の環境で発生しない overfull が, 印刷時の環境では発生することもある。このような事態をできるだけ回避するために, 文中の長い数式や `\verb` を避ける, パラグラフの先頭付近では長い英単語を使用しない, などの注意が必要である。

また、\\をパラグラフの終りで使用すると、

Underfull \hbox (badness 10000)...

のような警告が発生し、空行が挿入される。このような空行は入れないようにする。

#### 4.9 数式

- 本文中の分数

本文中では分数はなるべく  $\backslash(a/b)$  ( $a/b$  と印刷される) の形を使用し、文字が小さくなって読みにくい  $\backslash(\frac{a}{b})$  ( $\frac{a}{b}$ ) の形は極力避ける。また、本文中で無理矢理文字を大きくして、 $\$ \displaystyle \frac{a}{b} \$$  ( $\frac{a}{b}$ ) のようにすることも避ける。

- 別組数式中の分数

別組数式には、原則としてすべての数式に番号を振る。したがって、 $\backslash[ \text{と} \backslash ]$  で囲うのではなく、`equation` 環境などを用いることになる。別組の数式の場合には、本文中の数式の場合とは逆に、 $\backslash[a/b]$  ( $a/b$ ) よりも、 $\backslash[\frac{a}{b}]$  ( $\frac{a}{b}$ ) の形を使う方がよい。ただし、繁分数は極力避ける。たとえば、

$$\backslash[\frac{a+\frac{1}{2}}{b+\frac{1}{2}}]$$

による

$$\frac{a+\frac{1}{2}}{b+\frac{1}{2}} \quad (1)$$

よりも、

$$\backslash[\frac{a+1/2}{b+1/2}]$$

による

$$\frac{a+1/2}{b+1/2} \quad (2)$$

の形の方がよい。

- 互いに関連する別組の数式が 2 行以上連続して現れる場合には、`\begin{eqnarray}` と `\end{eqnarray}` を使って、等号 (あるいは不等号) の位置で縦揃えを行うと読みやすい。
- 数式モードで使用可能なフォントについては、表 2 の例を参考にしてほしい。

#### 4.10 figure/table 環境

1 段の幅におさまる図は、図 4 の形式で指定する。位置の指定は、原則として `[tb]` とし、`[h]` は使わない。1 段幅の図はなるべく 1 段目 (左側の段) に置

図 4

1 段幅の図

```
\begin{figure}[tb]
  図本体の指定
\caption{和文見出し}
\label{ラベル}
\end{figure}
```

くようにする。以上は、表についても同様である。

また、図の場合は図の下に、表の場合は表の上に、それぞれ `\caption` でキャプションを指定する。

2 段の幅にまたがる図は、図 5 の形式で指定する。表の場合は、同様に `tabular*` 環境を用いる。位置の指定には、原則として `[t]` を用いる。

#### 4.11 表

表の罫線はなるべく少なくするのが、仕上がりですっきりさせるコツである。表には、原則として横罫線のみを使用し、縦の罫線は使わない。表のタイトル (キャプション) は、図とは異なり、長くならないようにする。表の内容についての説明が必要な場合は、表の下に注釈を入れる。表 1 は、注釈付きの表の例である。

#### 4.12 箇条書き

箇条書きのためには、 $\LaTeX$  標準の `enumerate`、`itemize`、`description` 環境を使用する。字下げの量は全角 2 文字分である。

`enumerate` のラベルは、標準の

1. (a) i. A.

ではなく、

- (1) (a) (i) (A)

のように全て括弧付きであり、括弧の内側に小さな空白が挿入される。

**description 環境** 先頭の字下げなしで、本文の左側に全角 2 文字分のマージンを入れる。

**Description 環境** 先頭を 1 文字分字下げし、本文をマージンなしで続ける。

#### 4.13 引用

本文中で文章を引用をする場合は、短いものなら鉤括弧 (「〇〇〇」) を使用し、数行程度の比較的短いものなら `quote` 環境、それ以上の長いものなら `quotation` 環境を、それぞれ使用する。以下は、`quote` 環境の例 (文頭字下げなし、右マージンあり)



マンドを使って対処する<sup>3)</sup>。

#### 4.16 謝辞・付録

謝辞がある場合には、文献リストの直前に、コマンド `\acknowledgment` に続いて書く。

付録がある場合には、文献リストの直後に、コマンド `\appendix` に続いて書く。付録では、`\section` コマンドが **A.**、**B.** などの見出しを生成する。

#### 4.17 文献の引用

本文中での文献の参照には、`\cite` や `\citeA` などのコマンドを用いる。「…がすでに明らかにされている (山本・楠木, 2007)」のように文献への参照を本文の一部としない場合は、`\cite{yamamoto07}` のように `\cite` コマンドを用いる。「Miller (1956) の指摘によれば…」のように文献への参照を本文の一部として読む場合は、`\cite` の代わりに `\citeA` を用いる。

これらのコマンドは、「(Cohen et al., 1982; 橋田, 1992; 佐伯・佐々木, 1990; Sato, 1991; 山本・楠木, 2007)」や「Minsky (1975 白井・杉原訳 1979, 1986 安西訳 1990), Perrault (1990), Rosenschein (1987)」のようにまとめて引用したり、このように (詳しくは、伊藤, 1991 を参照) 引用の前後に言葉を入れることも可能である。

#### 4.18 文献リスト

`cs.cls` は、`jcscs.bst` を用いて日本語 BibTeX (upBibTeX) によって作られた `bbl` ファイルの存在 (またはそのような `bbl` ファイルの内容が論文ファイル本体に埋め込まれた状態) を前提としている。

`bbl` ファイルを作るには、

```
\begin{thebibliography}{}
.....
```

```
\end{thebibliography}
```

の代わりに

```
\bibliographystyle{jcscs}
\bibliography{bib ファイル名}
```

のように書いて、`LaTeX` を実行してから BibTeX を実行し、その後で `LaTeX` を 2 回実行する。

`bib` ファイルの書き方については、`sample.bib` を参照する。日本語名の著者に関しては `yomi` のフィールドを指定する。投稿にあたって論文のソースファイルを学会に送付する際は、`bbl` ファイルの

内容を上記の 2 行の代わりに埋め込む。

BibTeX を用いない場合は、

```
\begin{thebibliography}{}
.....
```

```
\end{thebibliography}
```

の間に下記のような項目を並べる。

```
\bibitem[\protect\BCAY{著者名}]{短い著者名}{発行年}{ラベル}
書誌情報
```

詳細については、このガイドのソースの末尾の文献リストの部分、および「執筆要領」を参照する。

なお、BibTeX の出力は完全ではない点に注意する必要がある。執筆要領にあるように *Publication Manual of the APA, 7th ed.* (American Psychological Association, 2020) および「執筆・投稿の手びき (2015 年改訂版)」(日本心理学会, 2015) に準拠するためには、出力結果の一部を手で修正しなければならない。

#### 4.19 著者紹介

論文や解説、一部の記事などでは、本文の最後 (`\end{document}` の直前) に、以下のようにして 200 字程度 (英語の場合 80 words 程度) の著者紹介を記述する。

```
\vita{第 1 著者名}{会員種別}
{写真ファイル名}{紹介文}
\vita{第 2 著者名}{会員種別}
{写真ファイル名}{紹介文}
.....
```

氏名は「認知 花子」のように姓名間に半角スペースを入れる。会員種別は、「(正会員)」(学生会員)」のいずれかとし、非会員の場合は空欄とする。著者写真ファイルは、トリミング (周囲の不要部分を切り取り) 済みで、横 472 px × 縦 591 px (600 dpi で 2 cm × 2.5 cm) のモノクロ画像ファイル (JPEG が望ましい) を用意する。

本文が英文の場合も `\vita` コマンドを使用するが、本文が和文で著者紹介のみ英文の場合は、`\vitaEn` コマンドを使用する。英文の会員種別は、「(Member)」, 「(Student Member)」とし、冒頭に半角スペースを入れて括弧も半角とする。

複数著者の論文で `\vita` を複数並べるときは、コマンド間に `\vskip\baselineskip` のように指定して 1 行分の空白を入れる。

#### 4.20 外字とフォントメトリック

JIS X 0208 に含まれない文字 (外字) は, OTF パッケージで扱える. 「\UTF{9AD9}島屋」とすれば, 「高島屋」のように表示できる. 人名によく使われる次の文字はコマンド化されている.

- 高 (U+9AD9): \ajHashigoTaka
- 崎 (U+FA11): \ajTatsuSaki
- 濱 (U+6FF5): \ajMayuHama
- 吉 (U+20BB7): \ajTsuchiYoshi

同一の Unicode が割り当てられている異体字は, CID を使って表示することができる.

```
\UTF{845B}: 葛 \CID{1481}／葛 \CID{7652}
\UTF{8FBB}: 辻 \CID{3056}／辻 \CID{8267}
\UTF{9089}: 邊 \CID{6930}／邊 \CID{14252}
```

OTF パッケージでは, 従来の日本語  $\text{\LaTeX}$  の min10 フォントメトリックとは異なる新しいものが採用されている. 従来のものは, 約物間のアキ (閉じ括弧の後にピリオドが来るような場合) や連続する小書き文字 (「ちよっと」など) の字間に不具合があったが, そうした点が改善されている. また, 従来は 1 文字の大きさが少し横長 (1 zw = 9.62216 pt, 1 zh = 9.16443 pt) であったが, OTF では 1 zw = 1 zh = 9.62216 pt = 3.38123 mm である.

#### 5. スタイルファイルおよび本文書の履歴

本文書の最初の版は, 1994 年の『認知科学』の創刊前に, スタイルファイル `jcass.sty` の完成にあわせて斉藤康己によって執筆され, その後, 橋田浩一によって改訂された. 「 $\text{\LaTeX}$  による論文作成ガイド (暫定版)」(`guide-and-sample.tex`) として, スタイルファイルとともに配布された.

2016 年 9 月に, 内海彰によって図の挿入方法に関する説明が追加され, また, 現状に合わなくなった古い記述が修正されて, 「 $\text{\LaTeX}$  による論文作成ガイド (改訂版)」(`guide-and-sample-revised.tex`) として学会ウェブページで配布された.

第 27 巻第 1 号 (2020 年 3 月刊行) からの学会誌オンライン化に合わせて, 記事レイアウトを変更することになった. そのため, 2019 年 12 月に服部雅史によってスタイルファイルが大きく修正され, 混乱を避けるために `cs.sty` に名称変更された. 全面改訂された本文書は, 「 $\text{\LaTeX}$  による『認知科学』論文作成ガイド 2020 版」(`sample.tex`) として公開された.

2021 年 12 月, 鳥居拓馬によって長年の悲願だったスタイルファイルの  $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  化 (`cs.cls`) が実現し, 第 29 巻第 1 号 (2022 年 3 月刊行) より新スタイルファイルによる組版に移行した. それに伴い, 本文書も再び服部雅史によって全面改訂され, 「 $\text{\LaTeX}$  による『認知科学』論文作成ガイド 2022 版」(`sample.tex`) として公開された.

#### 文 献

- American Psychological Association (2020). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.). American Psychological Association.
- Cohen, P. R., Perrault, C. R., & Allen, J. (1982). Beyond question-answering. In W. G. Lehnert, & M. H. Ringle (Eds.), *Strategies for natural language processing* (pp. 245–274). Laurence Erlbaum Associates.
- 橋田 浩一 (1992). 制約と統語解析 安西 祐一郎・石崎 俊・大津 由紀雄・波多野 諄余夫・溝口 文雄 (編) 認知科学ハンドブック (pp. 361–369) 共立出版
- 伊藤 和人 (1991).  $\text{\LaTeX}$  トータルガイド 秀和システムレーディング
- Lampert, L. (1986). *A document preparation system  $\text{\LaTeX}$  user's guide & reference manual*. Addison Wesley. (ランポート, L. E. Cooke・倉沢 良一 (監訳) (1990). 文書処理システム  $\text{\LaTeX}$  アスキー出版局)
- Miller, G. A. (1956). The magical number seven, plus or minus two: Some limits on our capacity for processing information. *Psychological Review*, 63(2), 81–89. <https://doi.org/10.1037/h0043158>
- Minsky, M. (1975). A framework for representing knowledge. In P. Winston (Ed.), *Psychology of computer vision*. McGraw-Hill. (ミンスキー, M. (1979). 知識を表現するための枠組 P. H. ウィンストン 白井 良明・杉原 厚吉 (訳) コンピュータビジョンの心理 産業図書)
- Minsky, M. (1986). *Society of mind*. Simon and Schuster. (ミンスキー, M. 安西 祐一郎 (訳) (1990). 心の社会 産業図書)
- 日本心理学会 (2015). 執筆・投稿の手びき (2015 年改訂版) 日本心理学会
- 認知 花子・知識 太郎 (2020, September 17–19).  $\text{\LaTeX}$  による論文作成 日本認知科学会第 37 回大会 オンライン開催
- Perrault, C. R. (1990). An application of default logic to speech act theory. In P. R. Cohen, J. Morgan, & M. E. Pollack (Eds.), *Intentions in communication* (pp. 161–185). MIT Press.
- Rosenschein, S. (1987). Formal theories of knowledge in AI and robotics. Report No. CSLI-87-84, Center for the Study of Language and Information, Stanford University. (ローゼンシャイン, S. 斎藤 浩文 (訳) (1990). AI とロボット工学における知識の形式理論 現代思想, 6(3), 127–139.)

3) この脚注はマーク (4.15 節) と離れた位置に現われている. これは, 本文書のこのソースにあるように簡単なトリックで実現できる. ソースファイルおよび Lampert (1986 Cooke・倉沢監訳 1990) の 156 ページ参照.



Sato, S. (1991). *Example-based machine translation*. Doctoral dissertation, Kyoto University.

佐伯 胖・佐々木 正人 (編) (1990). アクティブ・マインド 東京大学出版会

山本 淳一・楠本 千枝子 (2007). 自閉症スペクトラム障害の発達と支援 認知科学, 14(4), 621-639. <https://doi.org/10.11225/jcss.14.621>

## 付 録

### A. 論文原稿 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X ファイルの構成

```
\documentclass[dvipdfmx, 原稿オプション]{cs}

\usepackage[graphicx]
\usepackage{.....}

\topright{原稿種別}
\setcounter{巻数}{巻数}
\setcounter{号数}{号数}
\setcounter{page}{先頭ページ}
\doi{DOI}

\受付{西暦年}{月}{日}
\採録{西暦年}{月}{日}
\早期公開{西暦年}{月}{日}

\begin{document}

\title{表題 (和文)}
\titleEn{表題 (英文)}
\author{著者名 (和文)}
\authorEn{著者名 (英文)}
\affiliation{著者所属 (和文)}
\affiliationEn{著者所属 (英文)}

\begin{abstract}
  概要 (英文)
\end{abstract}

\history
\maketitle

\section{第 1 節の表題}

本文
.....

\acknowledgment
  謝辞

\begin{thebibliography}{}
  \bibitem{文献 1 ラベル}
    文献 1 書誌情報
  .....
\end{thebibliography}

\appendix
\section{付録第 1 節の表題}
  付録
  .....
```

```
\vita{著者 1 氏名}{会員種別}%
  {写真ファイル名}{紹介文 (200 字程度)}
\vskip\baselineskip

\vita{著者 2 氏名}{会員種別}%
  {写真ファイル名}{紹介文 (200 字程度)}
.....

\end{document}
```



認知 花子 (学生会員)

20xx 年日本認知科学大学認知科学部卒業。20xx 年同大学大学院認知科学研究科博士前期課程修了。現在、同後期課程在学中。20xx 年より日本学術振興会特別研究員 (DC1)。洞察問題解決の潜在認知過程に興味がある。人工知能学会、電子情報通信学会各会員。

※写真は <https://generated.photos/> による。



知識 太郎

19xx 年英国ダラム大学にて Ph.D. 取得。19xx 年同大学心理学科 PD, 19xx 年ミラノ・ピコッカ大学心理学科研究員を経て、20xx 年より株式会社認知科学社 CEO。確率推論、意思決定、問題解決などの研究に従事。Society for Judgment and Decision Making, European Association

for Decision Making 各会員。

※写真は <https://generated.photos/> による。



Homer Cogito (Member)

Homer Cogito is Professor of Psychology and Head of School at University of Cognitive Science, USA. He has authored over one hundred scientific publications in psychology, philosophy, and cognitive science, and has written or edited six books. He is Consulting Editor for *Psychological Review*, *Memory & Cognition*, and *Thinking & Reasoning*. His research explores the nature of reasoning, argumentation, and the influence of emotion on cognition.

— Photo by <https://generated.photos/>



学習 好子 (正会員)

19xx 年〇〇大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士 (文学)。19xx 年より日本認知科学大学心理学部、現在、同教授。カーディフ大学心理学部客員研究員、ÉPHÉ 客員研究員等を歴任。推論・判断、問題解決などの研究に従事。日本認知心理学会、日本心理学会、日本基礎心理学会、Cognitive Science Society, Psychonomic Society ほか会員。

※写真は <https://generated.photos/> による。